

## 現代朝鮮語の〈n挿入〉に関する一考察：発生論と機能論

辻野，裕紀  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://hdl.handle.net/2324/1687700>

---

出版情報：韓国朝鮮文化研究：研究紀要. 13, pp.79-96, 2014-03. 東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室  
バージョン：  
権利関係：

# 現代朝鮮語の〈n挿入〉に関する一考察

## —発生論と機能論—

辻野裕紀

### 1. 前言

本稿は、現代朝鮮語における〈n挿入〉の〈発生論〉と〈機能論〉について論ずるものである。〈n挿入〉という形態音韻論的現象がなぜ生じるのかについて、〈通時論〉と〈共時論〉の双方から攷察する。

### 2. 〈n挿入〉とはいかなる現象か

#### 2.1. 〈終声の初声化〉と〈n挿入〉

現代朝鮮語において、終声（音節末子音 / coda; final）を持つ音節、すなわち閉音節（closed syllable）に、母音（半母音を含む）で始まる音節が続くとき、当該の終声は後続する音節の初声（音節頭子音 / onset; initial）として実現する。つまり、朝鮮語において、(C)VC+V(C)という音節連続が生じると、休止（pause）を入れない限り、(C)VC\$V(C)と発音されることはなく、(C)V\$CV(C)と発音される（\$は音節境界）<sup>1</sup>。これを〈終声の初声化<sup>2</sup>〉（initialization of finals）と呼ぶ。

一方で、このような音韻論的環境のうち、後行要素が/i<sup>3</sup>や/y/で始まる((C)VC+i(C), (C)VC+yV(C))場合には、後続音節の初声の位置に/n/が挿入され、終声の初声化が阻止されることがある<sup>4</sup>。これを〈n挿入〉と呼ぶ<sup>5</sup>。〈n挿入〉は、「n添加（ㄴ첨가）<sup>6</sup>」, 「ㄴ뒹나기」(성낙

<sup>1</sup> なお、済州道方言では、「同音添加」によって、先行要素の終声と同じ子音が後行要素の初声として添加され、終声の初声化が生じないことがある。例えば가죽옷《革の服》は[kadʒu<sup>h</sup>k'o<sup>h</sup>], 오닐아침《今朝》(標準語形: 오늘아침)は[onollat<sup>h</sup>im]と発音される。배주채 (1996; 2011: 142) 参照。本稿はソウル方言を扱うものだが、終声の初声化が現代朝鮮語において必ずしも普遍的な現象ではないという点をまず押さえておきたい。

<sup>2</sup> 〈終声の初声化〉という用語を用いたのは、野間秀樹 (1988) が嚆矢である。終声の初声化は、「連音」ないし「連音化」と呼ばれることも多いが、連音 (= 音が連なる) という名づけは、音節構造が変容するという、終声の初声化の本質的な点を言い表しておらず、本稿では、終声の初声化という用語を用いることにする。因みに、韓国の標準発音法では、「뒤 음절 첫소리로 옮겨 발음된다」という形で説明されているだけで、術語は特に当てられていない。

<sup>3</sup> //内の表記は音素表記であり、本稿の音素表記は、趙義成・吳文淑 (2004) に拠る。

<sup>4</sup> 예닐곱《6つか7つ》, 오닐월《陰曆の5・6月》などのように、ごく稀に母音の後で/n/が挿入されているように見えるものもあるが、こうした類は普通いわゆる〈n挿入〉とは見做されないものであり、本稿でも扱わない。伝統的なソウル方言の간천《どぶ》, 신체《死体》, 안직《まだ》(유필재 2006: 276) などのような語に散発的に見られる/n/の挿入も、本稿の埒外である。

<sup>5</sup> 「標準語規定」(1988年1月19日大韓民国文教部告示第88-2号)の「第2部 標準発音法 第7章 音の添加 第29項」にも、次のような記述がある: 「합성어 및 파생어에서, 앞 단어나 접두사의 끝이 자음이 고 뒤 단어나 접미사의 첫 음절이 '이, 야, 여, 요, 유'인 경우에는, 'ㄴ'소리를 첨가하여 [니, 냐, 녀, 뇨, 뉴]로 발음한다」なお、この規定には、後行要素が애, 예で始まる場合の言及がないが、後行要素が애, 예で始まる場合にも〈n挿入〉は起きるので、국립국어연구원 (2003), 국경아・김주원・이호영 (2005) も言う通り、問題がある。

<sup>6</sup> 「n添加」という呼称も「n挿入」と同様によく用いられるが、「添加」という言い方は、/n/がどこ

す 1987ab, 김승호 1992など), 「リエーゾン」(菅野裕臣1965, 2006, 2007など<sup>7</sup>), 英語では, 'n-Epenthesis' (Kim-Renaud, Young-Key 1991), '/n,l/epenthesis' (Sohn, Ho-min 1994) などとも呼ばれる。

以下, 〈終声の初声化〉と〈n挿入〉の例を挙げる:

#### 【終声の初声化】

일본 [ilbon] 《日本》+어 [ɔ] 《語》→일본어 [ilbonɔ] 《日本語》

못 [moʰ] 《釘》+이 [i] 《が》→못이 [moʰi] 《釘が》

못 [mo:ʰ] 《…できない》+옵니다 [omnida] 《来ます》→못 옵니다 [mo:domnida] 《来られません》

안 [a:n] 《眼》+약 [ja<sup>k</sup>] 《薬》→안약 [anja<sup>k</sup>] 《目薬》

#### 【n挿入】

솜 [so:m] 《綿》+이불 [ibul] 《布団》→솜이불 [so:mniɸul] 《綿入りの布団》

국민 [kupmin] 《国民》+윤리 [julli] 《倫理》→국민윤리 [kupminɸjulli] 《国民倫理》

막- [ma<sup>k</sup>] 《荒い》+일 [i:l] 《仕事》→막일 [maɸnil] 《荒仕事》

맨- [men] 《何も混ざっていない》+입 [i<sup>p</sup>] 《口》→맨입 [menɸi<sup>p</sup>] 《空腹》

한 [han] 《した》+일 [i:l] 《こと》→한 일 [hanɸil] 《したこと》

옷 [oʰ] 《服》+입다 [i<sup>p</sup>t'a] 《着る》→옷 입다 [onni<sup>p</sup>t'a] 《服着る》

このように, 現代朝鮮語において, 閉音節に/i,y/で始まる音節が続くと, 話者は〈n挿入〉と〈終声の初声化〉のうち, 必ずどちらか一方を義務的に選択しなければならない。(C)VC+i(C), (C)VC+yV(C)という音節連続が生じると, 単一の氣息群 (breath group) で発音する限り, 単純語, 派生語, 複合語, 句を問わず, 〈n挿入〉か〈終声の初声化〉のいずれかが1つが必ず生じるのである。したがって, 「〈n挿入〉が起きるか起きないか」という問いは, 「〈n挿入〉と〈終声の初声化〉のどちらを選択するか<sup>8</sup>」という問いとほぼ同義である。〈n挿入〉

に出現するかがはっきりしない点で好ましくない。prothesis も epithesis も paragoge もすべて添加である。

<sup>7</sup> 菅野裕臣 (1965) は, 〈n挿入〉を「第2リエーゾン」, 終声の初声化を「第1リエーゾン」と呼んでいたが, 菅野裕臣 (2006, 2007) では, 〈n挿入〉を「リエーゾン」, 終声の初声化を〈enchaînement〉と称している。鑑かに, 終声の初声化はフランス語のアンシェヌマンと類似した現象であり, 〈n挿入〉もある一定の条件のもとで, ある種の音が単語と単語の境界に出現する, という点においては, フランス語のリエゾンと共通している (cf. les [le]+amis [ami] → les amis [lezami])。また, 後で見るように, 〈n挿入〉には, 義務的なものと選択的 (随意的) なものがあり, この点においても, 両者は類似している。なお, 1単語内における終声の初声化では, 形態音韻論的交替が起きることがあり, こうした場合にまでアンシェヌマンという術語を用いるのは問題があるかもしれない。フランス語のアンシェヌマンはどこまでも "il a" や "une école" のような, 単語間における連音を言うものである。

<sup>8</sup> なお, 終声の種類によっては, 終声の初声化の実現の仕方が2種類ある。1つは「終声の初声化①: 初声字母の位置に移した終声字母の音素が初声の音声として実現するタイプ=音節構造の変容後の音素が実現するタイプ (e.g. 옷이 [oʰi] 《服が》)」, もう1つは「終声の初声化②: 単独形における終声字母が表す音素が初声の音声として実現するタイプ=音節構造の変容前の音を維持し実現するタイプ (e.g. 옷안 [oʰan] 《服の裏地》)」であり, 一般に前者のほうが形態素境界が弱く, 後者のほうが形態素境界が強い (野間秀樹 2007: 311-312)。したがって, 例えば, 발이랑 (발 《畑》+이랑 《畝》, 발 《畑》+이랑 《…と》) という語形には, 〈n挿入〉が生じた [panɸniran] 《畑の畝》と, 終声の初声化②が生じた [padiran] 《id.》, そして終声の初声化①が生じた [patʰiran] 《畑と》という3種類の発音があ

を〈終声の初声化〉と対峙させる, 〈n挿入〉のこうした位置づけは, 〈n挿入〉の機能を考える上で極めて重要である。

## 2.2. 義務的な〈n挿入〉と選択的な〈n挿入〉

〈n挿入〉には, 「義務的 (obligatory) なもの」と「選択的 (隨意的) (optional) なもの」の2種類がある。よって, (C)VC+i(C), (C)VC+yV(C)という同一の音韻論的環境であっても, 次の3つの類型が存在するということになる<sup>9</sup>:

### ①常に〈n挿入〉が生じる (義務的 n挿入)

일본 [ilbon] 《日本》+요리 [jori] 《料理》→일본요리 [ilbonn̩jori] 《日本料理》  
한 [han] 《した》+일 [il] 《こと》→한 일 [hann̩il] 《したこと》

### ②〈n挿入〉, 終声の初声化の双方が生じうる (選択的 n挿入)

금 [kum] 《金》+융 [juŋ] 《融》→금융 [kumn̩juŋ] ~ [kumjuŋ] 《金融》  
정말 [tʃɔ:ŋmal] 《本当》+요 [jo] 《ですか》→정말요 [tʃɔ:ŋmalljo]<sup>10</sup>~ [tʃɔ:ŋmaljo] 《本当ですか》

### ③常に終声の初声化が生じる (禁止的 n挿入)

일본 [ilbon] 《日本》+이에요 [iejo] 《です》→일본이에요 [ilboniejo] 《日本です》  
일본 [ilbon] 《日本》+이 [i] 《が》→일본이 [ilboni] 《日本が》  
삼 [sam] 《三》+일 [il] 《一》+절 [tʃɔl] 《節》→삼일절 [samiltʃɔl] 《三一節》  
안 [a:n] 《眼》+약 [ja<sup>h</sup>] 《藥》→안약 [a:nja<sup>h</sup>] 《目藥》

このように, 〈n挿入〉には, 「常に起きるもの」, 「常に起きないもの」だけではなく, 話者によって「起きたり起きなかったりするもの」が少なからず存在し<sup>11</sup>, こうしたものの存在が, 〈n挿入〉という現象をより複雑なものにしていると言いうる。

## 2.3. 〈n挿入〉の生産性

〈n挿入〉には選択的 (隨意的) なものが多く, 先行研究の中には〈n挿入〉に生産性を認めないものもある。엄태수 (1995) は, 〈n挿入〉はもはや生産的な音韻現象ではなく, /n/を含む語形 (ibid. (:107) の術語では「ㄴ 삽입형」) は〈語彙化〉したものと見做している。例えば, 꽃이름 《花の名前》, 밭이랑 《畑の畝》, 옛이야기 《昔話》はそれぞれ [꾼이름] ~ [꼬

りうることになる。

<sup>9</sup> 例は野間秀樹 (2007: 299-300) による。「義務的 n挿入」, 「選択的 n挿入」, 「禁止的 n挿入」という名付けは, フランス語学の「義務的リエゾン」, 「選択的リエゾン」, 「禁止的リエゾン」(近藤野里 2010など) を借用して, 便宜的に施したものである。

<sup>10</sup> 先行要素の末音が/r/の場合には, 流音化 (舌側音化) により, 挿入子音/n/は, /r/[l] で実現する。

<sup>11</sup> 〈n挿入〉には個人差, 世代差, 方言差などがあり, 社会言語学的な視座からの分析も重要である。배주채 (1996; 2011: 142), 국립국어연구원 (2002, 2003), 신지영·차재은 (2003; 2004: 305), 국경아·김주원·이호영 (2005), 오세내 (2006), 김옥영 (2008), 정인호 (2010), 辻野裕紀 (2012), 後藤祐司 (2013)などを参照。

디름], [반니랑] ~ [바디랑], [엔니야기] ~ [예디야기] のように, /n/を含む形と含まない形が共存しているが, 前者は語形全体が語彙部門(어휘부)に登録されている語彙化した形, 後者は生産的な形態規則によって結合した形とする。

慥かに, 〈n 挿入〉には選択的(随意的)なものが多く, 同じ語句であっても, 話者によって, 〈n 挿入〉が起きたり起きなかったりする〈揺れ〉(fluctuation)が観察される。こうした類の揺れを解釈するのに, 語彙化という考え方はしばしば有効である<sup>12</sup>。また, 검열 [검열]《検閲》のような, 漢字語の〈語根+語根〉で起きる〈n 挿入〉についても, 語彙化という概念は同じく有効であろう。

しかし, 〈n 挿入〉に生産性が全くなく, /n/が挿入されている語句を悉皆語彙化したものと見做すと, postlexical なレベル, すなわち句で起きる〈n 挿入〉の説明に窮することとなる。また, 핫요가 [한뇨가]《ホットヨガ》, 맨유 [맨유]《マンU》など, 外来語の新語においても/n/が挿入されうることを勘案すると, 〈n 挿入〉の生産性を完全に否定するのは穏当ではないと考えられる。

#### 2.4. 〈n 挿入〉は本当に「挿入」か?

ところで, 茲まで〈n 挿入〉と, ア・プリアリに「挿入」という用語を用いてきたが, この現象が, 本当に「挿入」(insertion)なのかという問題にも触れておかねばならない。

つとに, 최현배 (1929; 1971: 133) が「소리를 더하여 내는 것」としたのを嚆矢とし, 多くの研究では, 「/n/が挿入される」という「挿入説」に立っている。つまり, /n/を含まない形を基底形とし, /n/を含む異形態は, 合成語形成ないし句形成の過程で/n/が「挿入」されることによって生じたものと考えられるわけである。これが, 菅野裕臣 (1965), 기세관 (1990, 1991, 1999), 김정우 (1994) など, 大半の先行研究の立場であり, 〈n 挿入〉, 〈n 添加〉などといった呼称の根底にある考え方である。

しかし, 一部の研究 (성낙수 1987ab, 1995, 김승호 1992など) においては, /n/を含む形のほうを基底形と見做し, /n/を含まない異形態は, /n/が「脱落」することで生じたものと見ている (これを「脱落説」と呼ぼう)。このような見方は, 〈n 挿入〉を通時的な観点に照らした場合, 一定の説得力を帯びる。あとでも述べるように, 고험모 (1991, 1992) によれば, 〈n 挿入〉は近代語の時期に/i/や/y/の前の/n/が休止や母音の後で脱落することによって発生した‘ㄴ~ㅇ’の交替が歴史的に/n/を持っていなかった単語にまで拡大された類推的变化の結果である。〈n 挿入〉のこのような発生論的事実に着目すると, /n/を含む形のほうを基底形と見做す考え方は決して故なきことではない。

Lee, Chungmin (1972) は, 後行要素が/i/で始まる場合に/n/が挿入されるのは基底形に/n/を含む語のみだとし, 音韻規則としての〈n 挿入〉は後行要素が/y/の場合に限定している。つまり, 後行要素が/i/で始まるものについては「脱落説」, 後行要素が/y/で始まるものについては「挿入説」に立っているわけである。挿入でも脱落でもなく, /y/→/n/という devocalization (無声音化) によって〈n 挿入〉を説明しようとする Lee, Yongsung and Lee, Minkyung (2006) も, /i/の場合に限っては, 基底形に/n/を認め, 脱落規則を設けている。

<sup>12</sup> 例えば, 엄태수 (1995: 107) も挙げている例だが, 「松の木」を意味する語として現代語には‘소나무’と‘솔나무’の2つが存在する。後者は生産的な単語形成規則(形態規則)によって作られた語形, 前者は現代語では生産性のない‘ㄴ’脱落規則が適用されている〈語彙化〉した語形である。(‘ㄴ’脱落規則が適用された同様の例としては他に, 아드님, 따님, 하느님, 마느님などを挙げうる。)

しかし、〈n挿入〉は, 콩엿 [콩넬]《炒り豆を混ぜて作った飴》, 샅일 [상닐]《賃仕事》などのように, 後行要素の頭音として本来/n/を持っていなかった語においても広く生じる上, 既に述べた通り, 外来語においても生じ, こうしたもので含めて共時的な立場から一元的に捉えようとするならば, /n/の「脱落」という記述の方向性には無理がある。また, 〈n挿入〉には常に起きるもののみならず, 選択的(隨意的)なものも多い点, さらには, 合成語のみならず句においても生じうる点を考慮すると, 「脱落説」はいよいよ厳しくなる。

通時的な起源はともかく, 共時的には, /n/は「脱落」するのではなく, 「挿入」されると見るのがより自然だと考えられ, 本稿でもその立場をとる。

## 2.5. 〈n挿入〉が生じるための形態論的条件

〈n挿入〉は「先行要素が子音で終わっており, かつ後行要素が/i,y/で始まる」という, いわば〈音韻論的条件〉を満たしてさえいれば必ず起きるというわけではない。〈n挿入〉が実現するためには, 音韻論的条件以外に, 「後行要素が自立的形態素でなければならない」という〈形態論的条件〉を満たしている必要がある。つまり, 〈n挿入〉は音韻論的条件と形態論的条件の双方がその実現如何を統べる〈形態音韻論的現象〉である。

先行研究の中には, 오미라 (2006) のように, 後行要素が補助詞彙の場合にも 〈n挿入〉が起きうることを指摘し<sup>13</sup>, 上の形態論的条件に異議を唱える論考もある。

また, 後行要素が漢字語接尾辞の場合にも 〈n挿入〉は起きえ<sup>14</sup>, 「後行要素が自立的形態素でなければならない」という条件には問題があるようにも見える。

しかし, 辻野裕紀 (2013) で詳論したように, 服部四郎 (1950/1960) の〈附属語〉, 〈附属形式〉という概念を援用しつつ, 〈結合要素の非選択性〉, 〈分離性〉, 〈交換可能性〉という, 形態素の自立性に関するメルクマールに照らした場合, 補助詞彙は, いわゆる拘束形式の中では自立性が相対的に高いと言いうる。また, 漢字語接尾辞も, 固有語接尾辞などとはその性質が大きく異なり, 形態論的にも意味論的にも自立性が高い<sup>15</sup>。このようなことから, 〈n挿入〉の実現のためには「後行要素が自立的形態素でなければならない」という形態論的条件は妥当である。

なお, あとで明らかにするように, 後行要素の自立性が〈n挿入〉の実現如何に関与するというのは, 通時的な視座から照射しても説得力のあるものである。

## 2.6. 〈n挿入〉が生じるための語種論的条件

また, 〈n挿入〉の実現如何は, 当該の語が固有語か漢字語かという, 語種論的な条件にも左右される。漢字語では, 後行要素が/i/で始まる場合には 〈n挿入〉が起きにくい。規範的な発音では, 辻野裕紀 (2012: 29-30) でも述べたように, 後行要素の頭音が/i/であっても, 先行要素の末音が共鳴音 (sonorant) の場合には 〈n挿入〉が生じることがあるが<sup>16</sup>, 阻害音

<sup>13</sup> 밥요? [밥뇨~바묘]《ごはんですか?》, 그러니깐요 [그러니깐뇨]《だからですよ》, 올 걸요 [올 쫄료]《来ると思いますよ》など。

<sup>14</sup> 학생-용《学生用》, 맹장-염《盲腸炎》, 지식-역《知識欲》など。

<sup>15</sup> 詳細は辻野裕紀 (2013) を参照されたい。

<sup>16</sup> 감언-이설《口車》, 괴담-이설《怪談異説》, 근본-이념《根本理念》, 몰-이해《没理解》, 불-이익《不利益》, 생-이별《生き別れ》, 선-이자《天引き》, 영-이별《永の別れ》, 인간-이별《死ぬこと》など。一方で, これらと類似した音韻論的環境であっても, 상대성-이론《相对性理論》, 미술-인쇄《美術印

(obstruent) の場合には生じない：

語種別に見た 〈n 挿入〉の実現様相<sup>17</sup>

語種	固有語	漢字語		
語構造	派生語, 複合語	語根+語根	派生語, 複合語	
先行要素末音	子音すべて	共鳴音		阻害音
後行要素末音	/i,y/	/y/	/i,y/	/y/
語例	숨-이불 《綿入りの布団》	금-음 《金融》	감언-이설 《口車》	어학-연수 《語学研修》

転じて規範的な発音から離れ、実際に20代のソウル方言話者をインフォーマントとして言語事実を調査してみると、後行要素の頭音が/i/の漢字語の場合、先行要素の末音を問わず、〈n 挿入〉はほとんど起きない<sup>18</sup>。〈n 挿入〉平均実現率は僅か約1.7%に過ぎなかった。

こうしたことから、〈n 挿入〉は漢字語においては、後行要素の頭音が/i/の場合、事実上起きないと言いうる。

## 2.7. 〈n 挿入〉の表記法をめぐる

〈n 挿入〉は、現行の正書法では南北ともに、表記に反映されない。したがって、例えば、수학여행《修学旅行》の発音が [수항녀행] なのか [수하겨행] なのかは表記だけを見ても決して分からない。これが、〈n 挿入〉が朝鮮語学習者にとって難しく感じられる大きな理由の1つでもある<sup>19</sup>。韓国の正書法では, 사랑니《親知らず》, 가랑니《子ジラミ》など、後行要素が「齒」を意味する이, 「虱」を意味する이の場合に限って、例外的に‘니’の如く、/n/ を含む形で表記されるが、これは主格助詞の이との混同を避けるための措置であろう<sup>20</sup>。例えば, 사랑니를 사랑이と書くと, 사랑이《愛が》との区別が表記上つかなくなる。しかし、こうした表記は、「一貫性」という点で問題があり、形態音韻論的表記法を採る、現代語の正書法の原則にも合致しないものである<sup>21</sup>。

刷), 평판-인쇄《平版印刷》, 중심-인물《中心人物》, 심판-이혼《審判離婚》, 조정-이혼《調停離婚》, 연월-일시《年月日時》などでは〈n 挿入〉が生じない。

<sup>17</sup> 辻野裕紀 (2012: 30) の【表2】を引用した。

<sup>18</sup> 筆者は2013年3月および9月にソウル特別市において、20代のソウル方言話者33名を対象に、〈n 挿入〉の実現実態調査を行なった。その詳細な結果および分析については、別稿を準備している。

<sup>19</sup> 菅野裕臣他 (1988; 1991) のようなごく一部のものを除き、辞書類でも、普通、見出し語以外では、〈n 挿入〉が起きるか否かまでは表示されておらず、非母語話者にとってはいわば判じ物である (これはいわゆる濃音化も同様である)。

<sup>20</sup> 김정우 (1998: 793) も「主格助詞-이と結合した形態と表記上で区分するための措置」と述べている。

<sup>21</sup> 菅野裕臣 (2006: 151) は、「上齒」を意味する語が、共和国では우이と書かれるのに対し、韓国では윗니と書かれることを挙げ、「この点で韓国の表記は極めて不徹底である」と述べている。また, ibid. (2007: 197) でも, 아랫니 (韓国) と아래이 (共和国), 윗니 (韓国) と우이 (共和国) の例を挙げ、「韓国でなぜこの場合“니”と書くのかは不可解である。中期朝鮮語では“니”だったが、現代語では“이”〈齒〉である」と述べている。(なお、共和国の正書法では사이시옷は表記されないが, 옷という形は接頭辞扱いされて認められているので, 우이ではなく우이가正書法上正しい。이경희 1997: 110も参照。) 一方で、/n/が挿入された語形のほうを基本形態と見做している성낙수 (1987ab, 1995) は、〈n 挿入〉が起きるものは発音通り/n/を表記し (e.g. 한녀름, 떡뇨, 겹니불, 발니랑, 물냐), 1つの形態素に対して、2種類の表記 (例えば여름と한녀름) を認めるべきだとしている。

なお、共和国（北朝鮮）においては、1954年に制定された「조선어 철자법（朝鮮語綴字法）」で사이표と呼ばれるアポストロフィ記号によって、濃音化および〈n挿入〉を表記にも反映させていたが、1966年の「조선말규범집（朝鮮語規範集）」の制定により、廃止された<sup>22</sup>。

### 3. 問題の所在と先行研究

茲まで〈n挿入〉がいかなる現象かについて、いくつかの視座から述べてきたが、いま1つ重要な問いが残されている。「〈n挿入〉という形態音韻論的現象がなぜ起きるのか」という、〈n挿入〉の〈契機論〉とでも称すべき問題である。

従前の諸論考においても、〈n挿入〉の生じる原因が研究の俎上に載せられてはいるものの、その見解については、衆目の一致を見ていない。先行研究の着眼点は、「音論的観点」, 「形態論的観点」, 「通時的観点」の3つに類型化しうる。以下、各々について概観および検証する。

#### 3.1. 先行研究：音論的観点

まず、音論的な観点から〈n挿入〉が生じる原因を論じている論考としては、최정순 (1986), 기세관 (1990), 김정우 (1994, 1998), 김차균 (1981)などを挙げる。

최정순 (1986), 기세관 (1990), 김정우 (1994, 1998)は、各々説明の文句は少しずつ異なるものの、いずれも、先行要素の末音の位置から急激に母音の位置に移動する(舌の)動きを緩和させる「緩衝音」として/n/が挿入されるという旨の見解を提示している。純粋な音声学的(生理学的)契機である。

しかし、/n/が挿入されるのは、語と語の間、接頭辞と語の間などの環境に限られており、音声学的な契機にのみ依拠すると、なぜ「体言+助詞」(e.g. 눈이 《雪が》), 「用言語幹+接尾辞」(e.g. 먹이- 《食べさせる》)などの環境で/n/が挿入されないのか、説明がつかない。また、/n/と調音点が同じ子音は/r/, /s/など他にも複数あり、なぜその中で/n/でなければならないのかも分明ではない。こうした問題点については既に김유범 외 (2002)も指摘しているところである。

ただし、尤も、音声学的な蓋然性が全くなければ音韻現象は起こりえないわけで、音論的契機のみで〈n挿入〉の全面的な説明が可能なわけではないが、二次的な要因として、かかる音論的な側面が作用している可能性はあると思われる。

김차균 (1981)は、「共鳴度 (sonority) 原理」という概念で〈n挿入〉の説明を試みている。共鳴度原理とは、音節境界において、先行子音の共鳴度が後行子音のそれよりも高いか同じでなければならないというもので、口音の鼻音化などの音韻現象の説明に有効な原理である。

しかし、〈n挿入〉が起きる音節境界は、後行要素の頭音が/y/の場合はともかく、/i/の場合は子音と子音ではなく、子音と母音が隣接する環境であって、十全の説明にはなっていない<sup>23</sup>。

<sup>22</sup> 이경희 (1997: 99-100) 参照。

<sup>23</sup> 一方、後行要素が/y/ (有声硬口蓋接近音) で始まる場合には、子音と子音が隣接する環境となる。Lee, Yongsung and Lee, Minkyung (2006)も, syllable contact constraint (音節接触制約) に着目し、後行要素の頭音が/y/の場合に限り、/n/が挿入されるのではなく、/y/がより共鳴度の低い/n/に交替する'devocalization' (無声音化) と見做している。



### 3.2. 先行研究：形態論的観点

形態論的な着眼は夙に, 허웅 (1983: 121) の次のような記述に仄見える：

말의 표현을 똑똑하게 하기 위해서 힘을 더 들이는 데서 일어나는 변동도 있으니, 없던 소리가 덧나는 일이 있다. 겹이름씨나 또는 이에 준할만 한 말에서, 뒷말의 첫소리가 /i, j/ 일 때에는 /ㄴ/이 덧나는 일이 있다. (下線は引用者)

下線部の「말의 표현을 똑똑하게 하기 위해서 (ことばの表現をはっきりさせるために)」という記述が, /n/の挿入の契機を述べているものとして注目される。しかし, 「表現をはっきりさせる」という説明は曖昧模糊としており, 〈n 挿入〉の契機を十分には説明しきれていない。

〈n 挿入〉の機能的な説明として最も主流だと言えるのが, Chung, Kook (1980: 57), 기세관 (1990, 1991, 1999), 김정우 (1998) などに見える, 「後行要素の自立性を確保するため」という見解である。/n/が後行要素の初声の位置に挿入されることによって, 終声の初声化(再音節化)が生じず, その結果, 後行要素の形が維持される。茲に〈n 挿入〉の機能があるというわけである。

このような着眼は, 「後行要素が自立的形態素でなければならない」という, 諸研究で述べられている形態論的条件に直結したものであり, 「後行要素が自立的形態素」という言語事実と合致するために, 一定の妥当性があるように見える。しかし, こうした説明の方向性は循環論に陥る危険性があり, またあとで述べるように別の問題もある。

### 3.3. 先行研究：通時論的観点

なぜ〈n 挿入〉が起きるかについて, 通時論的な観点から接近している論考もある。

まず, Kim-Renaud, Young-Key (1991) は, /n/が挿入されるようになったのは先行要素の末音の口蓋音化を防ぐためだと見ている。김정우 (1998: 806) も「/n/の挿入現象を口蓋音化入力の破壊のための措置と見た Kim-Renaud (1974) の指摘は歴史的観点から相当な妥当性を持つ論議として再吟味の価値があるものと考えられる<sup>24</sup>」とし, Kim-Renaud, Young-Key (1991) の説を支持している<sup>25</sup>。

しかし, 〈n 挿入〉は先行要素の末音が/d/や/t/の場合のみならず, 他の子音の場合にも生じ, この点をいかに説明するかが問題となる。もし通時的に見たとき, /n/の挿入が, 先行子音が/d,t/の形態素の場合に端を発しているのであれば, この説も稽查の余地があるが, Kim-Renaud, Young-Key (1991) にはそうした仔細な記述は見当たらない。まずは, 近代語における口蓋音化についての詳細な調査が必要であろう。また, そもそもなぜ口蓋音化を防遏する必要があったのかという素朴な疑問も残る。

通時論的接近のうち, 最も説得力があるのは, 河野六郎 (1955/1979), 고험모 (1991, 1992) の説である。夙に河野六郎 (1955/1979) は次のごとく喝破している：

[n] の挿入は多くの場合, いまだ語頭で ni 若しくは ny が許された中期語の時代に n を

<sup>24</sup> 原文は朝鮮語。日本語訳は引用者による。

<sup>25</sup> Kim-Renaud (1974) は, Kim-Renaud, Young-Key (1991) のもとになっている博士学位論文。

語頭に持った語が変化によつて語頭では i 若しくは y の前で n を脱落したものであつて、それが属格結合に於いて古い語頭の n を尚保つために生じたものである<sup>26</sup>。上例の 'ip《葉》は中期語では nip, 'i《齒》は中期語では ni であつた<sup>27</sup>。しかし常にさうとはかぎらず、上例の 'ir《仕事》は中期語でも 'ir であつたが、'ip, 'i 等の類推で [n] を挿入するに至つたのである<sup>28</sup>。

/n/が挿入される環境が実際には「属格結合」に限られない<sup>29</sup>という点では厳密さに欠けるものの、通時的なこの着眼は卓見であり、筆者も支持する。

고광모 (1991, 1992) も河野六郎 (1955/1979) と同じく、〈n挿入〉の発生の端緒を、近代語の時期に生じた/n/の脱落に求めている。すなわち、〈n挿入〉は/i/や/y/の前の/n/が休止や母音の後で脱落したことによって発生した‘ㄹ~φ’の交替が歴史的に/n/を持っていなかった単語にまで拡大された類推的变化の結果 (고광모 1991: 20, 1992: 48) だというのである。

こうした見解は、挿入される子音がなぜ他ならぬ/n/なのかという、音論的観点では十分に説明がつかない問いに対する明快な解にもなり、さらに、あとでも述べるように、後行要素が自立的形態素でなければならないという、形態論的条件に照らしても、肯綮に中つた知見である。

ただし、これだけでは、〈n挿入〉の共時的存在理由の説明にはならない。なぜ現代語においても〈n挿入〉が生産的に起き続けているのかについては、別途の思考が必要である。

#### 4. 〈n挿入〉の発生論と機能論

以上、〈n挿入〉がなぜ起きるかについて論じている既存の諸研究を概観してきたが、いずれの見解も各々問題点を孕んでいる。どの立場に立脚しても、〈n挿入〉が起きる理由を完全には説明することができない。この問題は一元論的な思考では闡明することが不可能である。音論、形態論、通時論をいわば三幅対として捉えなければならない。

筆者は、「〈n挿入〉はなぜ起きるか」という問いには、少なくとも2つの視角から肉迫する必要があると考える。

まず、1つは「なぜ〈n挿入〉が起きるようになったのか」という〈通時的側面〉である。これは、過去のある時点においてなぜ〈n挿入〉という現象が生起することとなったかを摸る〈発生論〉と言い換えてもよい。

そして、もう1つは「なぜ今も〈n挿入〉が起き続けているのか」という〈共時的側面〉である。これは、〈n挿入〉の〈機能論〉と換言してもよいだろう。

<sup>26</sup> 亀井孝他編著 (1996: 1384) でも、「リエゾン」という項目で朝鮮語の〈n挿入〉について次のように述べられている：「朝鮮語では、[i]「齒」、[jɔp]「横」のように [i] または [j] で始まる単語の一部は、その前に子音で終わる単語がきて複合語や句をなす場合に、[n] が入る。たとえば、[amni]「前歯」、[tʃimɲɔp]「家の横」など。この現象もやはり、かつて [ni] や [nj] で始まっていた単語が、単独形では [n] を失ったにもかかわらず、複合語や句の中では [n] を保存したためである。」

<sup>27</sup> 上例とは、속잎《裏葉》, 술잎《松ノ葉》, 뗏잎《竹の葉》, 아랫니《下ノ葉》のこと (引用者註)。

<sup>28</sup> 上例とは, 밤일《夜ノ仕事=夜業》のこと (引用者註)。

<sup>29</sup> 〈n挿入〉は、属格結合 (修飾構造) の複合語のみならず, 봄여름《春夏》のような等位構造の複合語や낮익다《馴染みのある》のような分離用言, さらには, 句などでも広く起きる。

先行研究では、このいずれか一方にしか触れていない論考が多いが、双方から照射してはじめて、〈n 挿入〉という現象を正確に捉えることができると思われる。

もし仮に〈n 挿入〉がごく一部の語句においてのみ余喘を保っている語彙的（個別的）現象であるならば、その機能を問う必要はない<sup>30</sup>。「過去の痕跡が〈言語化石<sup>31</sup>〉として現代語にも残存している」という言語事実そのものが、/n/を含む理由についての完き説明になりうるからである。しかしながら、現代語において、外来語などをも含む広範な語句において、しかもある程度の規則性と生産性を以って〈n 挿入〉が生じているのを見ると、고광모 (1991, 1992) のように、語史論的なコンテキストで〈n 挿入〉発生の契機を論じるだけでは不十分である。何となれば、「なぜ〈n 挿入〉という音韻現象が消滅せず、今なお起きているのか」という共時的問題の答えにはならないからである。こうした問いに対しては、〈n 挿入〉が何某かの職能や役割のごときもの、すなわち何らかの〈機能〉を果たしているからだと考えるほかない。〈n 挿入〉に〈n 挿入〉固有の〈機能〉があるからこそ、現代語においても、語彙的（個別的）なものではなく、ある程度規則的な音韻的現象として維持されているのであろう。〈n 挿入〉が発生してから現代語に至る過程で、何らかの機能を獲得していなければ、過去のある時点で〈n 挿入〉という音韻現象は消失し、一部の語彙に形骸化したものとしてその痕跡を残す程度に留まっていたに違いない。

それでは、〈n 挿入〉の機能とは一体何だろうか。しばしば誤解されるが、この共時的な機能は、通時的な契機と一致するとは限らない。〈通時的発生論〉と〈共時的機能論〉は別個の平面に属するものであり、井然と峻別して論ぜられねばなるまい。

以下、発生論と機能論の各々について順に考えていくことにする。

#### 4.1. 〈n 挿入〉の発生論

〈n 挿入〉の発生論は、先行研究、とりわけ고광모 (1991, 1992) で謂われているところを基に、ことばを補いつつ、改めて整理すると、次のようになろう。

まず、18世紀後半<sup>32</sup>に起きた、語頭の/i,y/の直前の/n/の脱落によって、이 (休止や母音の後) ~ㄴ (子音の後)《齒》のような形態音韻論的な交替が生じるようになる。合成語の中にのみ/n/が保存され、単独形などでは/n/が脱落したわけである。その当時の音韻規則は、まだ/n/の「挿入規則」ではなく、/n/の「脱落規則」であった。その後〈類推〉(analogy)によって、合成語における子音の後という環境で、元来/n/がなかった語にまで/n/が「挿入」されるようになり (e.g. 콩엿 [콩년], 밭이랑<sup>33</sup> [반니랑])<sup>34</sup>, それに伴って、〈再語彙化〉(relexicalization)<sup>35</sup>が進行したものと考えられる。この再語彙化によって、基底形から/n/がなくなり、/n/を含む形は「挿入規則」によって派生されることとなる。これが全域化した音韻

<sup>30</sup> 例えば、香粟の‘ㅁ’にいかなる機能があるか、などと問うことはほとんど無意味である。

<sup>31</sup> 〈言語化石〉という概念とその具体例については、송철의 (1993), 김성규・정승철 (2005: 265)などを参看されたい。

<sup>32</sup> /n/の脱落時期については、이기문 (1998; 2005: 208-209) 参照。홍윤표 (1994) も参照されたい。

<sup>33</sup> 이랑の中期語の語形はい림。

<sup>34</sup> これと類似した例としては、the idea is [ajdiəri:z], drawing [drɔ:riŋ] などに見られる、英語の「侵入の r (intrusive r)」を挙げうる。侵入の r については、亀井孝他編著 (1996: 1397), Matthews, P.H. (2009: 378) を参照。

<sup>35</sup> 「再語彙化」という概念については、이기문・김진우・이상억 (1984; 2000: 249-250) 参照。

規則としての〈n 挿入〉の成立である。

茲までが先行研究が闡明しているところであるが、驥尾に付して付け加えると、さらに次のようなことを言いうる。

まず、類推の拡大を助長したのは、音声学的な蓋然性である。3.1.でも述べたように、音論的契機のみで〈n 挿入〉の説明は不可能である。しかし、〈n 挿入〉は、최정순 (1986) などが提示している音論的契機がその背後にあるからこそ、一般化しえたわけであって、〈n 挿入〉の成立には、二次的な要因として音声学的な蓋然性が関与していたものと思われる。

そして、〈n 挿入〉はかくして、音声学的な蓋然性も相俟って、比較的規則的な音韻現象に変化していくわけだが、純粋な〈音韻現象〉にはならず、形態素も関与する〈形態音韻論的現象〉となった。つまり、ただ単に類推が無秩序に拡大していったわけではなく、/n/が挿入されるのは、後行要素が自立的な要素の場合に局限された。なぜならば、/n/の脱落は主に語頭で生じたものであり、語頭という環境に現れうるものは自立的な要素しかないからである<sup>36</sup>。すなわち、語頭に現れることのない主格助詞이, 指定詞-이다, ヴォイス接尾辞-이-をはじめとする一連の拘束的形態素は、常に語中でしか用いられないために、類推の対象になりえなかったのである。これが、とりもなおさず、現代語における、「後行要素が自立的形態素でなければならない」という形態論的条件が生じることとなった要因である。

また、漢字語では固有語と異なり、後行要素の頭音が/i/の場合には〈n 挿入〉がほとんど起きないが、こうした語種論的な差異も、時間軸上の類推作用という観点から見ると、容易に首肯しうる。すなわち、朝鮮語において、字音が/ni/で始まる漢字、なかんずく主要な漢字は極めて少なく<sup>37</sup>、漢字語においては、이 (休止や母音の後) ~ㄴ (子音の後) のごとき形態音韻論的交替がほとんど起きなかったのである。したがって、類推が生じようもない。一方で、/ny/で始まる字音は比較的多くあり、これが淵源となって、/n/が挿入される範囲が拡大されていくこととなった。

そして、このように〈n 挿入〉を通時的発生論の視座から説明することによって、挿入子音が他でもなく、何故に/n/なのかといった問いにも答えることができる<sup>38</sup>。

以上が、〈n 挿入〉がいかにして成立したのか、という通時的発生論である。

では、〈n 挿入〉はなぜ今なお起きているのだろうか。その共時的機能はいかなる点にあるのだろうか。

#### 4.2. 〈n 挿入〉の機能論

〈n 挿入〉の共時的機能を明らかにするために、〈n 挿入〉を〈終声の初声化〉と対峙させて考えてみたい。/n/が挿入される場合と、挿入されない場合（すなわち終声の初声化が起きる場合）を比べたときに立ち現れる違いこそが〈n 挿入〉の本質的な機能だと言えるからである。

<sup>36</sup> 他に接頭辞もあるが、/ni/や/ny/で始まる接頭辞は朝鮮語にない上、接頭辞が合成語の後行要素になることはありえない。

<sup>37</sup> 字音が/ni/で始まる漢字は、니は「你」「尼」「泥」「昵」「膩」など、니는「匿」「溺」など、닐は「昵」など、닐는「愆」などがある。닐, 닐, 닐という字音の漢字は存在しない。

<sup>38</sup> 3.1.でも述べたように、純粋に音論的な視座から説明しようとする、なぜ、/r/や/s/ではなく、/n/のみが挿入されるのか、/r/や/s/ではなぜだめなのか、という疑問が出てくる。( /n/と/r/, /s/は調音位置が同じである。)

第2章でも述べたように、一般に、現代朝鮮語において、終声を持つ音節、すなわち閉音節に、母音（半母音を含む）で始まる音節が続くとき、当該の終声は後続する音節の初声として実現する。つまり、朝鮮語において、(C)VC+V(C)という音節連続が生じると、休止を入れない限り、(C)VC\$V(C)と発音されることはなく、必ず(C)V\$CV(C)と発音される（\$は音節境界）。これを〈終声の初声化〉と称すわけであるが、この終声の初声化は、〈音節構造論〉ないし〈音節接合論〉とでも呼ぶべき視座から見据えると、音節構造の変容を引き起こすデバイスである。すなわち、終声の初声化は、先行要素の(C)VCという音節構造を破壊して(C)Vにし、音節境界と形態素境界の不一致を齎す現象である<sup>39</sup>。そして、音節境界が形態素境界と一致なくなると、聞き手は、聴覚的に形態素境界を認識しにくくなる。どこからどこまでが1つの形態素なのか、その切れ目が分かりにくくなるのである。

そして、休止を入れない限りほぼ不可避免的に起きる終声の初声化は、唯一〈n挿入〉が起きる場合にのみ阻止される。/n/が挿入されると、(C)VC+V(C)は、(C)VC+nV(C)という構造となり、終声の初声化を免れる。例えば、밤이슬《夜露》は、終声の初声化が起きると[바미슬]となり、形態素境界が分かりにくくなるが、[밤니슬]と/n/が挿入されると、形態素境界が容易に分かる。つまり、/n/が挿入されることによって、形態素の認識、すなわち、意味の把握が容易になるのである。しかも、現代語に/ni/, /ny/で始まる語はほとんど存在しないために<sup>40</sup>、他の語との意味的な衝突も生じえない。こうした、音節構造の変容を防遏し、形態素境界を明瞭にする働き、これが〈n挿入〉の機能ではあるまいか。言ってみれば、共時的には、挿入子音/n/は〈境界表示マーカー〉である。このように考えると、〈n挿入〉は、終声の初声化に抗うための装置として機能しているとも言える<sup>41</sup>。

3.2.でも論及したように、先行研究の中には、「後行要素が自立的形態素でなければならない」という形態論的条件に着目し、そこから〈n挿入〉の機能を「後行要素の自立性の確保」と結論づけるものもある（Chung, Kook (1980: 57), 기세관 (1990, 1991, 1999), 김정우 (1998)など）。しかし、こうした見解は循環論に陥りうるという論理学的問題のみならず、言語事実そのものにも違背する。例えば、밤이슬の[바미슬]（終声の初声化）と[밤니슬]（n挿入）を比べた場合、〈n挿入〉によって元来の形が守られるのは、むしろ先行要素のほうである。後行要素は、終声の初声化でも〈n挿入〉でも、初声に子音が挿入されることによって、形の変形を免れることはできない。形だけに注目すると、逆に「先行要素の形を保つこと」が〈n挿入〉の機能のようにも見える。（안약 [아낙] と 눈약 [눈낙], 한약 [하낙] と 한방약 [한방낙] を各々較べられたい。）

しかし、〈n挿入〉に先行要素の形態論的制約はなく、先行要素の形のみを保つことの必要

<sup>39</sup> 橋本萬太郎 (1978: 117-124) は、言語類型地理論の視座から、音節構造について、CVC構造の性格が濃いビルマ語、クメール語、ベトナム語、タイ語といった南方の諸言語と異なり、日本語や朝鮮語のような北方の言語はCV構造という性格が濃いと見ている。終声の初声化という現象は、朝鮮語の音節構造における、いわば「CV構造志向」の現れと言いうる。

<sup>40</sup> 外来語や남남, 녀석, 뉴똥, 니, 님などごく一部の語では語頭に/ni/, /nj/が立ちうる。

<sup>41</sup> 서보월 (1990: 88) の「ㄴ첨가는 국어의 음절형성과 관련된되어 음절구조상 기저음절화가 표면음절화로 재음절화됨을 방지하고자 일어난다. 앞요소의 말자음이 뒤요소의 모음에 결합되면 앞, 뒤요소의 자립성과 변별성을 잃게 되므로 이 2개의 요소들이 독립적으로 포함되어 있는 사실을 강하게 유지하고자 ㄴ을 첨가하여 재음절화로 인한 음절결합을 방지하게 되는 것이다.」, 野間秀樹 (2007: 299) の「/n/の挿入は、韓国語においてほぼ絶対的に起こる〈終声の初声化〉を拒みうる唯一のデバイス」といった指摘も、本稿の主張と軌を一にしている。

性やその論理的根拠を見出すことは不可能である。〈n挿入〉の機能は、どちらか一方の自立性を確保する、あるいは、どちらか一方の要素の認識を助ける、というよりは、双方の形態素の認識を助けること、すなわち境界を表示するところに重きがあると考えるのが穏当な結論であろう<sup>42</sup>。

ところで、〈n挿入〉は、/i,y/の直前でのみ生じる現象であり、なぜ後行要素の頭音が/i,y/のときにだけ形態素境界を示す必要があるのか、という指摘や批判もありえよう。なぜ일본요리では形態素境界を示す必要があり、なぜ일본음식では形態素境界を示す必要がないのか、といった類の疑問である。実際、고광모 (1991:7, 1992:39) は, 밤일 [밤닐] と 밤알 [바말] を対比させ、後行要素が/i,y/で始まるときのみ/n/が挿入される理由が説明されなければならないだろうと述べている<sup>43</sup>。

しかし、4.1.で見たとおり、/n/はもともと、境界表示マーカとしての機能を持っていたわけではない。語の語頭子音という、それ自体には何の積極の意味もない、本来は分離不可能なものが、類推によって、合成語や句の中の形態素境界に挿入されることになり、結果的に境界表示マーカとしての機能を獲得するに至ったのであった。すなわち、/n/が境界表示マーカとなったのは、限られた環境の中で起こった、ある意味では偶発的な、歴史的変遷の結果物であって、境界を表示する絶対的必要性のために/n/が挿入されるようになったというわけでは決してない。換言するならば、〈n挿入〉は、現代朝鮮語にとって原理的に絶対的に必要なデバイスではないのである<sup>44</sup>。もし/n/によって境界を表示することが不可欠であるならば、さらに類推作用によって、/i,y/以外の母音の前でも〈n挿入〉が起きようになり、より広い範囲に適用される音韻規則になっていったであろう。あるいは今後そのようになっていくはずである。しかし、言語事実はむしろそれと正反対である。국립국어연구원 (2002), 국경아·김주원·이호영 (2005) などの調査が明らかにしているように、〈n挿入〉は世代が下るにしたがって、漸次起きにくくなっているのである。そして、そこには〈n挿入〉の機能的な剰余性 (redundancy) が大きく関与しているものと考えうる。

例えば, 밭이랑は、意味を考慮しなければ, [반닐랑], [바디랑], [바치랑] という3通りの発音がありうる。このうち、《畑と》という意味ならば [바치랑] (終声の初声化①) となり、《畑の畝》という意味ならば [반닐랑] (n挿入) ないし [바디랑] (終声の初声化②) という発音になる。辞書に記載されている規範的な発音では [반닐랑] だが、実際には [바디랑] と発音する話者も多い<sup>45</sup>。では, [반닐랑] と [바디랑] の違いは一体何なのだろうか。

前述の通り、〈n挿入〉の機能は形態素境界の表示にある。一方で, [바디랑] という、先行要素の末音がそのまま生かされるタイプの終声の初声化 (終声の初声化②) にも同様に形態素境界を表示する機能がある。それは例えば, 옷안 [오단] 《服の裏地》を, 옷에 [오세] 《服に》

<sup>42</sup> 서보월 (1983:44) が〈n挿入〉は「分節의 속성, 음절, 모음의 長短 등과는 아무런 관계없이 경계의 有無에 기인하다」と述べているのは示唆的である。

<sup>43</sup> 김정우 (1998:799) も, 밤일と밤알を比べつつ、同じ旨の指摘をしている。

<sup>44</sup> 例えば, 꽃이름 《花の名前》は, [꼰닐름] と [꼬디름] という2つの語形が併存しているが、特に意味の違いは見当たらないし、どちらを用いても、コミュニケーション上の支障を来すことはない。〈n挿入〉が起きるか起きないかで、意味の相違が生じる語例もなくはないが (큰일, 칠일, 반일など)、その数は決して多くないと思われる。

<sup>45</sup> 국립국어연구원 (2003:24) によれば、ソウル方言話者の73.14%が [바디랑] と発音したとのことである。

との対立の中で見れば分明である。これは, 꽃잎 [꽃잎] 《花びら》と꽃에 [꽃에] 《花に》の対立と平行的である。

詮ずるに, 〈n 挿入〉も〈終声の初声化②〉も共に境界を表示するところにその機能があり<sup>46</sup>, こうした機能的な観点から見れば, 〈n 挿入〉か終声の初声化②のどちらか一方は, 「余分」であるということになる。[반니랑] でも [바디랑] でも말と이랑の境界を示すことができるのである。ではどちらを「余分」だと考えればよいだろうか。

まず, 終声の初声化②は, 後行要素の頭音の母音の種類を全く問わない。一方で, 〈n 挿入〉は後行要素の頭音が/i,y/の場合に限定される。つまり, 〈n 挿入〉よりも終声の初声化②のほうが適用される範囲がはるかに広い。こうして見ると, 剰余的なのは, 終声の初声化②ではなく, 〈n 挿入〉のほうだと見るのが妥当であろう。だからこそ, 〈n 挿入〉が次第に衰退しつつあるのだと思われる。

しかし, ここで看過してはならないのは, 終声の初声化に2種類が存在するのは, つまり, 〈n 挿入〉が機能的に剰余的になるのは, 先行要素の末音の基底音素が{ㄷ, ㄷ<sup>47</sup>, ㅌ, ㅌ, ㅍ, ㅍ, ㅍ, ㅍ<sup>48</sup>}など一部のものに限定されるという点である。先行要素の末音の基底音素が{ㅁ, ㅁ, ㅁ, ㅁ, ㅁ}のような場合には, 〈n 挿入〉は剰余的ではない。例えば, 슬을 という語において, 슬と을の形態素境界を示す音的デバイスは, 休止を除けば唯一 〈n 挿入〉しかない。若年層の発音においても, 〈n 挿入〉が完全には消失せず, 現代語でもある程度保たれているのは, こうした事情が影響しているのであろう。

## 5. 結語

最後に, 本稿で述べたところを簡略に整理し, 擱筆することとする。

まず, 本稿の問いは, 「〈n 挿入〉という形態音韻論の現象がなぜ生じるか」という点にあった。この問いに対し, 既存の諸研究は, 大きく分けて〈音論的観点〉, 〈形態論的観点〉, 〈通時論的観点〉の3つの視座から各々接近しているが, いずれも問題点が見受けられた。〈n 挿入〉がなぜ生じるかという問題は一元論的な思考では闡明することが不可能である。

そこで筆者は, この問いを2つに立て直し, 考察を行なった。

1つは「なぜ〈n 挿入〉が起きようになったのか」という〈通時的側面〉である。これは, 過去のある時点においてなぜ〈n 挿入〉という現象が生起することとなったかを摸る〈発生論〉と言い換えてもよい。

そして, もう1つは「なぜ今も〈n 挿入〉が起き続けているのか」という〈共時的側面〉である。〈n 挿入〉の〈機能論〉と呼ぶべき問題である。

まず, 〈n 挿入〉の〈発生論〉については, 고평모 (1991, 1992) の説に基づき, 〈n 挿入〉の起源を18世紀後半の, 語頭における/i, /y/の直前の/n/の脱落に求めた。そして爾来, 〈類推〉(analogy)によって, 合成語における子音の後という環境で, 元来/n/がなかった語にまで/n/が挿入されるようになり, それに伴って, 〈再語彙化〉(relexicalization)が進行した。こ

<sup>46</sup> 〈n 挿入〉と〈終声の初声化②〉をまとめて「絶音法則 (절음 법칙)」と呼ぶことがある。

<sup>47</sup> 現代語において{ㄷ}で終わる体言は存在しないが, 副詞や用言語幹が{ㄷ}で終わることはある : e.g. 끝이어 [고디어] 《引き続き》, 굳이 [구지] 《あえて》。

<sup>48</sup> 先行要素の末音が{ㅇ}の場合は, 終声の初声化が生じえないため, /n/が挿入されなくても, 形態素境界は聴覚的にもともと明瞭である。

の再語彙化によって、基底形から/n/がなくなり、/n/を含む形は「挿入規則」によって派生されることとなる。これが音韻規則としての〈n挿入〉の成立である。

そして、この成立過程は、音声学的蓋然性に支えられている。後行要素が自立的形態素の場合のみに〈n挿入〉が起きうること、漢字語において後行要素の頭音が/i/で始まる場合には〈n挿入〉がほとんど起きないことも、この発生論的視座から説明可能である。

〈n挿入〉の〈機能論〉については、〈n挿入〉を〈終声の初声化〉と対峙させて考えることで、その機能が〈形態素境界の表示〉にあることを明らかにした。また、〈n挿入〉の機能的剰余性の問題についても言及した。

## 参考文献

### (1) 日本語文献

- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著 (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』, 東京:三省堂.
- 菅野裕臣 (1965) 「現代朝鮮語のリエゾンについて」, 『朝鮮学報』36, 天理:朝鮮学会.
- 菅野裕臣 (2006) 「朝鮮語の音と文字」, 『韓国語学年報』2, 千葉:神田外語大学 韓国語学会.
- 菅野裕臣 (2007) 「文字, 音, 正書法」, 『韓国語学年報』3, 千葉:神田外語大学 韓国語学会.
- 菅野裕臣・早川嘉春・志部昭平・浜田耕策・松原孝俊・野間秀樹・塩田今日子・伊藤英人共編 (1988; 1991) 『コスモス朝和辞典 第2版』, 金周源・徐尚揆・浜之上幸協力, 東京:白水社.
- 河野六郎 (1955) 「朝鮮語」, 服部四郎・市河三喜編 『世界言語概説 下巻』, 東京:研究社. 【河野六郎 (1979) に再録されている】
- 河野六郎 (1979) 『河野六郎著作集1』, 東京:平凡社.
- 後藤祐司 (2013) 「丁寧化マーカー‘-yo’ と n 挿入現象に見られる方言差」, 『ありあけ 熊本大学言語学論集』12, 熊本:熊本大学文学部言語学研究室.
- 近藤野里 (2010) 『フランス語話し言葉におけるリエゾン — Aix-en-Provence コーパスを用いた統語・音韻分析』, 東京外国語大学大学院修士論文.
- 趙義成・呉文淑 (2004) 「朝鮮語」, 『言語情報学研究報告4 通言語音声研究 音声概説・韻律分析』, 東京:東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」.
- 辻野裕紀 (2012) 「現代朝鮮語の〈n挿入〉をめぐって —形態論的条件と語種論的条件を中心に—」, 『外国語教育研究』15, 東京:外国語教育学会.
- 辻野裕紀 (2013) 「言語形式の自立性と音韻現象 —現代朝鮮語の〈n挿入〉を対象として—」, 『朝鮮学報』229, 天理:朝鮮学会.
- 野間秀樹 (1988) 『갈 朝鮮語への道』, 東京:有明学術出版社.
- 野間秀樹 (2007) 「形態音韻論からの接近」, 野間秀樹編著 『韓国語教育論講座 第1巻』, 東京:くろしお出版.
- 橋本萬太郎 (1978) 『言語類型地理論』, 東京:弘文堂.
- 服部四郎 (1950) 「附属語と附属形式」, 『言語研究』15, 東京:日本言語学会. 【服部四郎 (1960) に再録されている】
- 服部四郎 (1960) 『言語学の方法』, 東京:岩波書店.
- Matthews, P.H. (2009) 『オックスフォード言語学辞典』, 中島平三・瀬田幸人監訳, 東京:朝倉書店. 【原著は1997年刊行】



## (2) 朝鮮語文獻

- 고광모 (1991) 「ㄴ첨가와 사이시옷에 관하여」, 『언어연구』 3, 서울: 서울대학교 언어학과.
- 고광모 (1992) 「ㄴ첨가와 사이시옷에 대한 연구」, 『언어학』 14, 서울: 한국언어학회.
- 국경아·김주원·이호영 (2005) 「선호도 조사를 통한 ㄴ첨가 현상의 실현 양상 연구」, 『말소리』 53, 서울: 대한 음성학회.
- 국립국어연구원 (2002) 『표준 발음 실태 조사』, 최혜원 (연구 책임), 권미영·황연신 (공동 연구), 서울: 국립국어연구원.
- 국립국어연구원 (2003) 『표준 발음 실태 조사Ⅱ』, 김선철 (연구 책임), 권미영·황연신 (공동 연구), 서울: 국립국어연구원.
- 기세관 (1990) 『국어 단어형성에서의 /ㄹ/ 탈락과 /ㄴ/ 첨가에 대한 음운론적 연구』, 원광대학교 대학원 박사학위논문.
- 기세관 (1991) 「첨가음 /ㄴ/의 기능」, 『어문논총』 12·13, 광주: 전남대학교.
- 기세관 (1999) 「첨가음 ‘ㄴ’의 성격」, 『선청어문』 27, 서울: 서울대학교 국어교육과.
- 김성규·정승철 (2005) 『소리와 발음』, 서울: 한국방송통신대학교출판부.
- 김승호 (1992) 「콧소리 덧나기」, 『국어국문학』 11, 부산: 동아대학교.
- 김옥영 (2008) 「ㄴ-첨가 현상의 제약: 강릉 지역어를 대상으로」, 『음성·음운·형태론 연구』 14-1, 서울: 한국음운론학회.
- 김유범·박선우·안병섭·이봉원 (2002) 「‘ㄴ’ 삽입 현상의 연구사적 검토」, 『어문논집』 46, 서울: 민족어문학회.
- 김정우 (1994) 『음운 현상과 비음운론적 정보에 관한 연구』, 서울대학교 대학원 박사학위논문.
- 김정우 (1998) 「/ㄴ/삽입 현상의 형태론과 음운론」, 『방언학과 국어학 청암 김영태 박사 회갑기념논문집』, 서울: 태학사.
- 김차균 (1981) 「음절 이론과 국어의 음운규칙」, 『인문과학연구소 논문집』 8-1, 대전: 충남대학교 인문과학연구소.
- 배주채 (1996; 2011) 『국어음운론 개설』, 성남: 신구문화사.
- 서보월 (1983) 「경계의 음운론적 기능」, 『안동대학 논문집』 5, 안동: 안동대학.
- 서보월 (1990) 「ㄴ첨가에 대하여」, 『어문논총』 24, 대구: 경북어문학회.
- 성낙수 (1987a) 「이른바 ‘ㄴ덧나기’에 대하여」, 『한국어학과 알타이어학』, 대구: 효성여대출판부.
- 성낙수 (1987b) 「이른바 한국어의 두음법칙 연구」, 『한글』 197, 서울: 한글학회.
- 성낙수 (1995) 「구개음화되는 /n/의 표기에 대하여」, 『동방학지』 89·90, 서울: 연세대학교 국학연구원.
- 송철의 (1993) 「언어 변화와 언어의 화석」, 『국어사 자료와 국어학의 연구 (안병희 선생 회갑기념논총)』, 서울: 문학과지성사.
- 신지영·차재은 (2003; 2004) 『우리말 소리의 체계 국어 음운론 연구의 기초를 위하여』, 서울: 한국문화사.
- 엄태수 (1995) 「복합어의 음운현상과 최적이론」, 『어문연구』 88, 서울: 한국어문교육연구회.
- 오미라 (2006) 「ㄴ-삽입 환경의 재검토」, 『언어학』 14-3, 논산: 대한언어학회.
- 오새내 (2006) 『현대국어의 형태음운론적 변이 현상에 대한 사회언어학적 연구』, 고려대학교 대학원 박사학위논문.
- 유필재 (2006) 『서울방언의 음운론』, 서울: 월인.

- 이경희 (1997) 「현행 북한의 맞춤법 규정에 대하여 —남북한의 차이점을 중심으로」, 김민수 편저 『김정일 시대의 북한언어』, 서울 : 태학사.
- 이기문 (1998; 2005) 『신정판 국어사개설』, 서울 : 태학사.
- 이기문 · 김진우 · 이상억 (1984; 2000) 『국어음운론』, 서울 : 학연사.
- 정인호 (2010) 「ㄴ첨가 관련 현상의 방언 비교」, 『방언학』 10, 광주 : 한국방언학회.
- 최정순 (1986) 『국어 음운규칙의 단계적 적용에 대하여 —탈락과 삽입을 중심으로—』, 서강대학교 대학원 석사학위논문.
- 최현배 (1929; 1971) 『우리말본』, 서울 : 정음사.
- 허용 (1983) 『국어학』, 서울 : 샘문화사.
- 홍윤표 (1994) 『근대 국어 연구 (I)』, 서울 : 태학사.

### (3) 英語文献

- Chung, Kook [정국] (1980) *Neutralization in Korean : A Functional View*, Ph.D. dissertation, University of Texas at Austin.
- Kim-Renaud, Young-Key [김영기] (1991) *Korean Consonantal Phonology*, 서울 : 한신문화사.
- Lee, Chungmin (1972) 'Boundary Phenomena in Korean Revisited', *papers in linguistics*, 5-3.
- Lee, Yongsung, and Lee, Minkyung (2006) 'n-insertion as y-devocalization in Korean', 『언어』 *Korean journal of linguistics*, 31-3, 서울 : 한국언어학회.
- Sohn, Ho-min (1994) *Korean*, London&New York : Routledge.

【附記】本研究は，平成24年度科学研究費補助金研究活動スタート支援（研究課題番号：24820032）「現代朝鮮語における〈n挿入〉の総合的研究」の成果の一部である。

**Discussion on n-Insertion in Modern Korean**  
**— Genetic Theory and Functional Theory —**

TSUJINO Yuki

This paper discusses the occurrence theory and the functional theory of n-insertion in modern Korean, and the reason why the morphophonological phenomenon, n-insertion, occurs is considered from both the diachronic theory and the synchronic theory.

Current studies approach the issue of n-insertion from three major viewpoints, namely, phonologic, morphologic, or diachronic viewpoints. Nevertheless, each viewpoint has disadvantages. Clarification of the issue of n-insertion is not possible with just a single viewpoint.

Hence, the author considers this issue from two aspects. (1) The diachronic genetic theory: “What caused n-insertion to occur?” and (2) the synchronic functional theory: “Why does n-insertion continue to occur today?”

First, regarding the n-insertion genetic theory, as based on the theory of 고헤모 Kwang Mo Ko (1991, 1992), the origin of n-insertion is traced to the omission of /n/ immediately before /i/ and /y/ in the first part of a word, as observed in the latter half of 18<sup>th</sup> Century. Later, /n/ was inserted after a consonant of compound words by analogy, even in words which did not originally contain an /n/, resulting in development of relexicalization. Due to relexicalization, /n/ has disappeared in its underlying form, and words containing /n/ have been derived as a result of the “insertion rule”. In this way, n-insertion has developed as a phonological rule.

This process is supported by phonetic probability. According to the genetic theory viewpoint, n-insertion occurs only when the following element is an independent morpheme, and that n-insertion hardly occurs in Sino-Korean words in cases where the initial sound of the following element starts with /i/.

For the functional theory of n-insertion, n-insertion was compared with initialization of finals, and was shown to function as a sign of the morphology borderline. Furthermore, the problem of the functional surplus of n-insertion is discussed.